様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：２２３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２９２２

研究課題名（和文）中世和歌における叙景表現の研究

研究課題名（英文）Study of scenic description in medieval Waka

研究代表者
板野　みずえ（ITANO, Mizue）

群馬県立女子大学・文学部・准教授

研究者番号：７０８６７００１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、新古今時代の和歌に見られる個別の「叙景」意識を分析することで、新古今歌人の和歌において「景」がどのような機能を果たしているのか、そしてそのとき「心」はどのような形で存在しているのかということについて検討を進めるとともに、「叙景」の定義も再検討し、「叙景」という観点から中世和歌史を書き換えた。
具体的な表現分析を積み重ねた結果、新古今時代には「景」と「心」との乖離が生じ始めていること、この傾向が突き詰められて、京極派に至って「景」と「心」が等価の、別個のものとして歌われるようになったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「叙景」という新たな切り口から和歌史を書き換えたこの研究成果は、先行研究の蓄積によって形作られてきた和歌史を今一度相対化することに寄与した。また、和歌本文に即した表現研究が乏しい昨今の和歌研究において、客観的な表現論を積み重ねて大きな見取り図を提示したことには意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, the awareness of scenic description in individual poems is analyzed with a view to examining the functions that "scenery" fulfilled in poems by Shinkokin poets and the form in which the "mind" or "heart" existed in these poems.At the same time,I redefined "scenic description" and rewrote Medieval Japanese poetry history from the viewpoint of "scenic description".
The result of repeated concrete analysis,I revealed that discrepancy between scenery and mind or heart is starting to occur in Shinkokin period and as a result the scenery and the mind or heart were given expression in a poem while being alienated from each other at the period of the Kyogoku school.

研究分野：中世和歌

キーワード：中世和歌　叙景表現　新古今時代　京極派

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

さまざまな側面から研究が積み重ねられてきた和歌研究の中でもとりわけ、新古今時代の和歌は研究の対象となる歌人や和歌行事の多さ、歌そのものの難解さから、その一つ一つの課題について個別の研究が積み重ねられてきた。個々の成果が蓄積した現在、研究はそれらを統合して、「新古今時代」を和歌史の中に位置づけ直すべき段階にさしかかっていた。

また申請者は、これまでの和歌研究で自明のものとして扱われていながら、一方では研究者により微妙に指し示す範囲の異なる概念として用いられてきた「景」「心」「叙景」といった語も、今一度再検討しなければ研究の進展は望めないと考えた。加えて「叙景」の問題を扱う際には、京極派の和歌が「叙景」を体現した具体例として特権化されすぎてきたむきがあった。確かに京極派の和歌は、長い和歌史の中でも目立つ「叙景」的な要素を有しているが、京極派の和歌に至るまで、そしてまた京極派の活動が活発であった時代にもまた、二条派に代表されるいわゆる正統的な和歌が詠まれ続けていたことにも目を向ける必要がある。しかし叙景表現の研究において、二条派の和歌はその対象から外されることが多く、「叙景」という観点が広く和歌史全体に適用されることはなかった。

申請者はこのような研究上の問題点を整理する中で、「叙景」という観点から和歌史を改めて書き換えるという着想を得るに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は新古今時代の和歌の分析を足がかりに、「叙景」という切り口から、語の再定義、先行研究の再検討を踏まえて、新たに和歌史を書き換え、和歌における「叙景」とは何かという根源的な問いを解き明かすことである。

３．研究の方法

本研究では個別の作品における「叙景」意識を分析することで、中世和歌において「景」がどのような機能を果たしているのか、そしてそのとき「心」はどのような形で存在しているのかということについて以下の３つのテーマから検討を進めた。

(1) 藤原良経の歌壇活動と和歌表現の分析

まずは新古今時代前夜の和歌活動を牽引した藤原良経に着目した。これまでまとまった形で示されたことのなかった藤原良経の歌壇活動の記録を、散佚資料を集成することで一覧にして示し、特に歌題に着目して分析を進め、また藤原良経自身の詠作を特徴づける表現にも着目することで、藤原良経を歌壇主催者と歌人という両面から検討し和歌史の中に改めて位置づけた。

(2) 新古今時代の和歌を特徴づける表現の分析

「よそ」「ながむ」「身」など、新古今時代に特徴的な用いられ方をしていると考えられる表現を取り上げ、詠作史を辿りつつ同時代の和歌の用法を比較検討することで、これらの語がどのような表現意図に基づき選び取られたものであるのかを「叙景」意識という側面から明らかにした。

(3) 新古今時代以後の叙景表現の傾向

新古今時代の和歌に見出された景のありかたが以後どのような変遷をたどったのかということを、二条派の和歌、京極派の和歌の双方を視野にいれ同時に分析することで明らかにした。特に京極派の和歌との共通性が見出される新古今歌人寂蓮、新古今時代以後の百首歌で増加する寄物恋題、京極派が多用する表現である「向かふ」、この３つの点から新古今時代以後の和歌における景の様相を分析した。

これら３つのテーマで個々の和歌の分析を行った上で、「叙景」についての先行研究の整理と問題点の抽出を行い、分析結果に照らして再検討と再定義を行った。

４．研究成果

具体的な用例分析から、新古今時代の和歌では「景」にそのまま「心」を託すということがもはや不可能になってきており、その傾向は新古今前夜の良経歌壇から見られ始めていることが明らかになった。新古今時代の和歌において、景と心とは複雑なねじれを持ち、疎外しあいながら一首中に詠み込まれている。中には景と心とが重なり合わないことを逆手に取り、そのこと自体を詠みこむことで新たな表現性を獲得している和歌も見られる。

こうした「景」のありかたは新古今時代以後の和歌にも見出される。二条派の和歌においてはこの問題を打開するための一つの方策として、景物に情を託すという古典的なレトリックとしての寄物の手法が用いられ、それが寄物恋題の増加という形で現れ出ている。

一方京極派の和歌においては、「景」と「心」とが疎外しあうという状況をそのまま発展させ

る方法が見られ、そこでは疎外が突き詰められ、「景」と「心」とが等価の存在感を持つものとして対峙する、という構図が用いられるようになっている。

そしてこの研究では最終的に、和歌における 「景」は、広義の「心」を離れては成立せず、情や主観を排した純然たる風景描写としての「叙景」は存在しないが、その上で「景」と「心」の分離に直面したのが和歌史における新古今時代から京極派の時代であり、分離に向き合う手法が異なる表現を取って現れ出ているということを明らかにした。

「叙景」という新たな切り口から和歌史を書き換えたこの研究成果は、先行研究の蓄積によって形作られてきた和歌史を今一度相対化することに寄与していると考える。また、和歌本文に即した表現研究が乏しい昨今の和歌研究において、客観的な表現論を積み重ねて大きな見取り図を提示したことには意義があると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 板野みずえ	４．巻 43
２．論文標題 寄物題における景	５．発行年 2023年
３．雑誌名 群馬県立女子大学国文学研究	６．最初と最後の頁 40-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 板野 みずえ	４．巻 2021
２．論文標題 京極派和歌における景と「心」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 樹間爽風	６．最初と最後の頁 16～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.60196/wakan.2021.1_16	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 板野みずえ	４．巻 第99巻第1号
２．論文標題 「新古今時代の和歌における「身」」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 板野みずえ	４．巻 第42号
２．論文標題 中世和歌における「面影」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 群馬県立女子大学国文学研究	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 板野みずえ
2．発表標題 中世和歌における「面影」
3．学会等名 群馬県立女子大学国語国文学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 寺田澄江・ 陣野英則・ 木村朗子編	4．発行年 2021年
2．出版社 青簡舎	5．総ページ数 434
3．書名 身と心の位相　源氏物語を起点として	

1．著者名 板野みずえ	4．発行年 2024年
2．出版社 花鳥社	5．総ページ数 336
3．書名 新古今時代の和歌表現	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関